

# L change the World

2008(平成20)年2月11日鑑賞〈梅田ピカデリー〉

★★★



監督＝中田秀夫／出演＝松山ケンイチ／藤村俊二／工藤夕貴／鶴見辰吾／福田麻由子／南原清隆／高嶋政伸／佐藤めぐみ／福田響志／平泉成／波岡一喜／石橋蓮司(ワーナー・ブラザース映画配給／2008年日本映画／129分)

## 第2章

映像が先か、活字が先か

……前編・後編で完結したはずの『デスノート』だが、L 人気に乗じて三匹目のどじょう狙いに……？ 鳥インフルエンザの人への感染が現実的脅威となっている今、新型ウイルスによる、生態系維持のための人類削減計画が実行に移されたら……？ L がそんな企みの前に立ちはだかることによって、「世界の中田」らしくスケールの大きな作品に仕上がったが、その中でのLの変化と成長は……？ そしてまた、タイトルの意味は……？

### 三匹目のどじょうは……？

ハリウッドはもうかる映画、もうかる企画に血まなこで、「シリーズ」ものが大はやりだが、それは日本の映画界も同じ。集英社の週刊少年ジャンプに連載されたカリスマコミック『DEATH NOTE』を金子修介監督が映画化した『DEATH NOTE (デスノート) (前編)』(06年)、『DEATH NOTE (デスノート) the Last name』(06年)は、若者たちの圧倒的支持を受けて大人気となり、「デスノート現象」を引き起こした。

この前編、後編の主人公は、法の正義の無力さを痛感し、「デスノート」によって犯罪者を死亡させ、理想的な社会を築いていこうとした夜神月(ライト)(藤原竜也)(『シネマルーム11』393頁、『シネマルーム12』85頁参照)だが、予想以上の大人気となったキャラが、このライトと対決する松山ケンイチ演ずる天才探偵L。今ドキの若者たちには正統派天才ライトより、①L座り、②L持ち、③L打ち、④L走りをするケツタイなキャラのL、そして甘いお菓子里に目がなく、ひょっとこをかぶり、白の長袖TシャツにジーンズというファッションのLの方が親しみをもてるということかも……？

そこで、原作にもない三匹目のどじょうを狙い、Jホラー生みの親である「世界の  
中田」こと中田秀夫監督を起用してムリヤリ(?)企画し実現したのが、Lのキャラ  
だけに集中した本作。前編、後編に比べると客の入りはイマイチだが、さて三匹目の  
どじょうは……?

## 🎬『デスノート』第3弾と言えるのは……?

映画の冒頭、予告編で再三観たパソコンを前に「97%の確率でキラは日本にいま  
す」とワタリ(藤村俊二)に告げるLの姿が登場する。これを観るといかにも『デス  
ノート』第3弾が始まったという感じだが、実はキラとLとの対決は『DEATH  
NOTE(デスノート) the Last name』で終わっているのでは……?

そう思いながら観ていると、案の定①ワタリはすぐに死んでしまい、②デスノート  
を燃やそうとする際、死神が登場し止めに入るものの、結果的にはLによってすぐに  
燃やされてしまい、③ライトも<sup>あまねミサ</sup>弥海砂(戸田恵梨香)もラスト近くにホンの一瞬の出  
番があるだけ、だから、実はこの映画には『デスノート』第3弾という実体は何もな  
し……?

ただ、キラ事件を終結させるためにLがとった究極の選択とは……? それをここ  
に書くわけにはいかないが、その一点のみに『デスノート』第3弾と言える意味があ  
るから、その位置づけをしっかりと……。

## 🎬邦画もやっとウイルス戦争を……

鳥インフルエンザウイルスが鳥から人間に感染し、日本に上陸したらどうなるか  
……? それについて厚生労働省は、最大2500万人が感染して病院を受診し、64万  
人が死亡すると推計している。そんな危機感の広がりの中(?)、最近の洋画にはウ  
イルス戦争を想定したものが多い。

ミラ・ジョヴォヴィッチ主演の『バイオハザード』シリーズ(02年、04年、07年)  
(『シネマルーム2』235頁、『シネマルーム6』300頁参照)がそうだし、ダニー・ボ  
イル監督の『28日後…』(02年)(『シネマルーム3』236頁参照)やファン・カルロ  
ス・フレスナディージョ監督の『28週後…』(07年)がその代表作。

ところが、島国ニッポンはその方面についての危機感が薄いため(?)、これまで  
映画のテーマとしてあまり取り入れられてなかった。ところが、中田秀夫監督はこの

映画でウイルス戦争に注目し、Lがその感染防止のため得意分野の知的作業のみならず、不得意分野の肉体派としても活躍する姿を描いている。

## タイでの撮影は……？

そのため、この映画の最初の舞台はタイのある村。そこでは、強力なウイルスによって感染した住民が次々と死亡していく姿が映し出されていく。このタイでの撮影は、オープンセットの建設、大量のタイ人のエキストラの雇用、ヘリコプターでの村の爆破など、「このシーンだけで15億円はかかりそう」と思われたらしいから、かなり大規模なもの。

さらに中田監督らしく、ウイルスに感染して死んでいく村人たちにはきっちりリアルな演技をさせているから、それが不気味。したがって、スクリーン上であまりそういう気味の悪いものを観たくない私は、少し薄目にしたほどだ。

そして、フランシス・フォード・コッポラ監督の『地獄の黙示録』（79年）を彷彿させるシーンによって、その村は一気に焼き払われることに。ここで自ら犠牲となってタイ人の少年「BOY」（福田響志）を日本に送り返したのが、ワタリが設立したワイミーズハウスでLらと共に英才教育を受けたF（波岡一喜）だが、なぜBOYはウイルスに感染しないの……？ 誰もがそういう疑問を抱くはずだが……。

## 生態系維持のための人類削減計画の是非は……？

この映画では国際派女優の工藤夕貴が悪役（？）久條希実子として登場！ 久條はFやLと同じように、ワタリが設立したワイミーズハウス出身の天才Kだが、今は二階堂公彦（鶴見辰吾）教授の助手としてウイルス研究に関わっていく中、ある恐ろしい構想を抱くようになっていた。その構想とは、生態系維持のための人類削減計画！ つまり、地球上にあふれている60億以上の人口を半減しなければ生態系の維持ができないとすれば、その解決策は簡単。すなわち、人類を削減すればよい。そしてそのためには強力なウイルスを使えばよいという恐ろしい思想だ。

そんな思想をもった科学者久條と結託したのが、表向きは環境保護団体を名乗っているブルーシップの的場大介（高嶋政伸）。彼はもともとブルーシップのリーダーであった加賀見シン（石橋蓮司）を殺害し、①可憐な外見とは裏腹に、ナイフ・銃を使いこなす武闘派の美女三沢初音（佐藤めぐみ）、②ブルーシップ新入りメンバーの吉

沢保（金井勇太）、③ブルーシップの中で最もコンピュータの扱いに長けた小西朝夫（正名僕蔵）とともに、人類削減計画実現のための実行部隊の役割を果たし始めたから大変。さあ、Lは久條希実子や的場大介らとどのように対決していくのだろうか……？

## ウイルス研究はセットでなくちゃ

この映画によると、タイのある村で使用されたウイルスは感染力がきわめて強く、鳥インフルエンザウイルス以上……？ ちなみに、現在日本では鳥インフルエンザのワクチンは既に開発されているらしいが、実際それがどこまで役に立つのかは不明……？ このように人類はウイルスの発生とその感染防止のためのワクチン開発についてイタチごっこをくり返してきた。しかし、今回は人間の力でウイルスを作り出したのだから、当然その開発者は同時に感染防止のためのワクチンも開発しているはず。そうでなければ開発に関わる科学者自身の命があぶないし、もし誰かが勝手にウイルスを使用した場合は大変なことになる。

久條も的場も当然そう考えていたが、タイの感染症事件で唯一人の生き残りとなったBOYを見て、何らかの危険を感じとった二階堂公彦教授は、もしもの場合を考えワタリに相談していたよう。しかしてその内容は……？ また、娘の二階堂真希（福田麻由子）は低血糖症のため、定期的に注射を打っていたうえ、4時間ごとに体温を測定することも厳命されていた。さて、それらは一体何を意味するの……？

そんなこんなの、ウイルス防止のためのワクチン開発をめぐる大騒動がこの映画後半のテーマ。そして、二階堂教授亡き後に登場するのが彼の元同僚だった松戸浩一（平泉成）。彼はLからいきなりワクチンの開発を依頼されたわけだが、それはホントは荷が重すぎるのでは……？

## Lの成長と変化は……？

『デスノート』第3作は、良くも悪くもLのキャラがポイント。そして松山ケンイチは『椿三十郎』（07年）の若侍（バカ侍？）井坂伊織とは全然異なる高度な知的レベルで頭脳戦にチャレンジ。もっとも、それだけなら前編も後編も同じだが、3作目のテイストが大きく異なるのは、Lがパソコンの前という定位置から現場主義に変わる（変わらざるをえない）こと。また、Lにとって感染症の生き残りであるタイ人の

BOYは、寡黙だがどうも数学の天才らしいからつき合いやすい男の子。しかし、勝気な少女真希はLの想定外の行動をとるから、何かと扱いにくいのでは……？

そんな2人の子供と行動を共にする中、いつしかLの任務は、ウイルスを使って人類削減計画を実行しようとする久條と、その計画を利用して（売却して？）巨大な金を手に入れようとする的場との対決になっていった。そこで問題は、「最期の23日間」という限定がついていたこと。Lがジャンボジェット機の操縦席に乗り込んで、暴走する機体に急ブレーキをかけるシーンなどは、中田監督ならではのハリウッド風アクション（？）だが、Lがそんな不得意な分野にまで進出し、身体を張ったのは一体何のため……？ 松山ケンイチファンならずとも、そんなことを考えながら、特異なキャラをもった人物Lの変化と成長をこの映画でじっくりと味わいたいものだ。そうすれば、この映画のタイトルの意味も自然に納得できるのでは……？

2008(平成20)年2月16日記

ミニコラム

### 「千円法案」は私が元祖！

08年3月4日付産経新聞「正論」に載った、日本財団笹川陽平会長の「たばこ『1箱千円』へ値上げを」という問題提起が今大きくなねりに！ 試算によれば、値上げによって消費量が3分の1に減っても3兆円の増税が見込めるらしい。消費税値上げに踏み込みたくない政治家にはそれが魅力で、欧米並みだと千円、国民の健康と医療費削減のためにも値上げはプラスと大反響。6月13日には、たばこ1箱千円を目指す超党派の「たばこ健康を考える議員連盟」が設立された。

しかし、ちょっと待ってくれ！  
「たばこ1箱千円法」の提案は私の方

が先だ。すなわち、07年6月の『シネマルーム12』掲載の『サンキュー・スモーキング』に関連したミニコラムで、「たばこにドクロマークをつける法案より、もっと直截に私は『たばこ1箱千円法案』を提案したい」と書いた。同時に「坂和法案成立のためには、そんなリーダーシップをもった政治家が不可欠だが……」と書いたが、今やつと党派の枠を超えてその動きが。中川秀直（自民）、北側一雄（公明）、前原誠司（民主）ら議連代表たちによる法案の早期実現を期待したい。

2008(平成20)6月18日